

## サント・ステファノ騎士団のルッカ人騎士

松 本 典 昭

### ルッカ

いまならフィレンツェからバスか電車で1時間10分ほどのルッカ。現在はトスカーナ州北西部の一地方都市に過ぎないが、かつては決してトスカーナ大公国に併合されることをいさぎよしとしなかった独立都市国家であった。これはフィレンツェが、ピストイア(1329)、アレツォ(1337)、プラート(1350)、ヴォルテッラ(1361)、ピサ(1406)、コルトーナ(1411)、リヴォルノ(1421)と次々に周辺の都市国家を併合し、最後まで抵抗したシエナ共和国をもついに1555年に陥落させてトスカーナ一円を支配するにいたった領土拡張の過程を考えると、よりいっそう稀有のことに思われる。

フィレンツェにかたくなまでに抵抗したルッカ人の気概は、現在も完璧な姿を残す第三市壁の城壁からもうかがい知ることができる。これは1504年から1645年にかけて建設された。高さ約12メートル、周囲約4.2キロの城壁には、まるで身を守る硬い栗の棘のように四方八方に11の稜堡が突き出して、難攻不落を強烈に印象づける特異な外観を形成している。大砲の出現によって生まれた16世紀の理想的な城塞都市の典型である。

1119年に自由都市コムーネとなったルッカは、12-13世紀に絹織物工業で空前の繁栄を経験し、同時期には大聖堂をはじめとしてサン・ミケーレ・イン・フォロ教会やサン・フレディアーノ教会などロマネスク様式の傑作を残した。その後、幾度か独裁の危機の時代もむかえたが、1369年に再度自由を回復してからは、少

数の上層市民からなる貴族寡頭政的な共和国体制を築き上げた。1520年にルッカを訪れたマキアヴェッリは、「ルッカ事情概要」を次のように書き出している。

「ルッカ国はサン・マリノ、サン・パオリーノ、サン・サルヴァドーレと呼ばれる三つの地域に分かれる。ルッカの行政を司る最高機関は、三名ずつ各地域から選ばれた九名の市民で、これとは別に正義の旗手と呼ばれる主席がおり、彼らの長である。両者を総じて政府(シニョリア)、旧称を用いる場合には長老会議(アンツィアーニ)と呼ぶ。これと並んで人数からその名が付いた三十六人会があり、またさらに七十二人会があって、こちらが総評議会(コンシリオ・ジェネラーレ)である。この三つの機関が国の重責をすべて担って」いる、と<sup>1)</sup>。

それからマキアヴェッリは、役職の選出方法の違いなど、フィレンツェ共和国との相違点に論を進めるのであるが、現在のわれわれの眼から見ると、「正義の旗手」を初めとする「政府(シニョリア)」の任期が2カ月であることなど、二つの共和国の体制は驚くほど似ている。むしろ相違が顕在化するのは、1532年にフィレンツェ共和国のほうの名実ともに君主国に変貌をとげたあとのことである。共和国と君主国はおたがいに相容れないライヴァル国となるが、国土の面積の点でも軍事力・経済力の点でも後者は前者を圧倒していた。だからこそ逆に小国ルッカがフィレンツェに併合されもせず、1799年のナポレオン軍の侵入まで独立を維持しえたことは驚嘆に値するのである。

さて、そんなルッカ共和国から若干名ではあ

るがサント・ステファノ騎士が出ている。彼らはいったいいかなる履歴の持ち主なのか。いかなる生涯を送ったのか。彼らの他に騎士志願者はいなかったのか。ルッカ・フィレンツェ関係はどのようなものだったのか。これらの疑問を多少なりとも解明できるとすれば、サント・ステファノ騎士団の裏面史を垣間見る絶好の機会となるはずである<sup>2)</sup>。

## 10人の騎士

サント・ステファノ騎士団の名声はトスカーナ以外にまで轟いていたので、当初からメディチ家の臣民たるトスカーナ人とともに多くの外国人も入団していた。コジモー一世による騎士団創立の1562年からジャン・ガストーネの死去によってメディチ家が断絶した1737年までのあいだに、トスカーナ大公国出身者は約68パーセント、イタリア内の他国の出身者は約28パーセント、そしてイタリア以外の他国の出身者は約4パーセントであった<sup>3)</sup>。

ルッカ人の名前も数は多くないけれども記録に残っている。入団を望みながら果たせなかった志願者の数はさらに多かったはずである。1562-1609年（つまりコジモー一世、フランチェスコ一世、フェルディナンド一世の初期三代団長時代）に、サント・ステファノ騎士団へは1385人の騎士が入団したが、非トスカーナ人が605人であるのに対して、ルッカ人はわずかに6人である。1562-1737年の全体を通してみると、この間の全騎士4438人のうち、ルッカ人はわずかに10人を数えるにすぎない。

そのルッカ人騎士10名の名前は以下の通りである。カッコ内は入団の年。

コジモ・ディ・ポッジョ（1562）  
 アウレリオ・ディ・ポッジョ（1563）  
 ジュゼッペ・ディ・ポッジョ（1564）  
 バルトロメオ・ガリカーニ（1566）  
 ジュゼッペ・ベルティ（1584）  
 ジョ・フラヴィオ・ファヌッチ（1587）  
 フィリッポ・ファティネッリ（1621）

ジョヴァンニ・サンティーニ（1621）  
 グレゴリオ・パニーニ（1624）  
 アントニオ・ラッファエッリ（1624）<sup>4)</sup>

コジモー一世時代（1562-74）が4人、フランチェスコ一世時代（1574-87）が2人、フェルディナンド一世時代（1587-1609）が0人、そしてコジモ二世が1621年に死去した後、幼いフェルディナンド二世に代わって祖母と母、つまりフェルディナンド一世妃クリスティーナ・ディ・ロレーナとコジモ二世妃マリア・マッダレーナ・ダウストリアの二人の大公妃が摂政をつとめた時代（1621-30）に4人である。

ルッカ共和国とトスカーナ大公国の対立関係を考えれば、メディチ家に仕えたルッカ人は祖国との絆を断ち切ったと思われがちであるが、サント・ステファノ騎士のなかには例外的な存在もいる。6人目の騎士ジョ・フラヴィオ・ファヌッチのように若くして騎士の遠征に参加した後、祖国ルッカに戻って名誉ある余生を送った者もいるのだ。しかしファヌッチ以後の4人中3人は事前に祖国を追放され、帰国した騎士はすぐに立ち退きを強制された。このように10人のルッカ人騎士はそれぞれの運命を背負って生きねばならなかったのである。

サント・ステファノ騎士になった最初のルッカ人は、コジモ・ディ・ヴィンチェンティ・ディ・ポッジョである。ポッジョ家は1522年7月に起こった有名な反政府暴動、いわゆる「ポッジョ家の反乱」のためにルッカ史に名をとどめている。反乱の2年前の1520年にマキアヴェッリも「近頃では、ポッジョ家と呼ばれる一家が名を馳せており、よい共和国にはふさわしくないことが連日起きていて、これまでのところ手の打ちようがない」と述べている<sup>5)</sup>。結局、1522年7月の反乱では、謀反人7名が死刑、その他多数が追放刑に処された。

コジモ・ディ・ポッジョは、反乱の失敗後にフィレンツェのアレッサンドロ・デ・メディチの宮廷に難を逃れたルッカの謀反人ヴィンチェンティ・ディ・ポッジョの息子である。1537年にアレッサンドロ公がロレンツィーノ・デ・メ

ディチに暗殺されると、ヴィンチェンティは新に公爵となったコジモー世の庇護下に移り、コジモは彼をピサの城代に任命した。ヴィンチェンティはピサで4年間を過ごした後にアレツォの城に移り、その地で1552年に死んだ。だから息子のコジモ・ディ・ポッジョも父の縁でメディチ家と関わることになり、幼少の頃より公爵の小姓をつとめた。そして長くルッカ共和国政府を脅かしつづけたフィレンツェのルッカ人亡命者グループのなかで成長したのだった。そうした亡命者のなかには、サント・ステファノ騎士団への入団を志願した次のような二人のルッカ人もいた。ルッカでの欠席裁判で死刑と財産没収の判決を受けたロレンツォ・ディ・ヴィンチェンティ。彼は亡命者のなかでもルッカ政府に最も激しく抵抗しつづけた領袖である。いま一人はフランチェスコ・ディ・ニコロ・サミニアーティで、彼もルッカ政府を脅かしつづけた。彼は1553年に公爵コジモー世と公爵妃エレオノーラが出資する絹織物の工房をピサで開業する仕事をコジモ自身からおおせつかった。事業は成功しなかったが、絹織物で有名なルッカにとってはピサの絹織物工業を育成しようとするメディチ家の努力じたいが甚だしい脅威であったことは疑いない。そうした環境のなかで成長したコジモ・ディ・ポッジョが、サント・ステファノ騎士団への入団の願書を提出したのは、騎士団の聖別式（コンサクラツィオーネ）がピサの大聖堂で1562年3月15日に挙行されてから一月もたない4月8日のことであった。一族が祖国で失った名誉ある地位を騎士の尊厳で取り戻そうと功名を急ぐ若者の野望がよく表れている。そして念願かなって1562年5月10日にピサでサント・ステファノ騎士団の着衣式に臨むことができた。20歳の春である。彼は少々血の気の多い若者だったようである。1564年の夏にリヴォルノで別の騎士から喧嘩を売られ、血気にはやるコジモのふりあげた拳には、一族の古い貴族家系としてのプライドの残滓が握りしめられていた。その翌年には、トルコ軍に脅かされたマルタ島を救援するための遠征に志願

し参加した。有名なマルタ包囲戦である。さらには血気のあまり騎士団教会の牢獄につながれたこともあった。それは1567年9月上旬のこと、夜の第二時に修道院前の広場で仲間の騎士たちを率先して手に手に火のついた箒をふりかざしながら大騒ぎをしてあばれまわった事件である。「他の騎士たちの悪い見本」として見せしめのために投獄されたのだった。彼の短い生涯は、無鉄砲な憤怒に急変しやすい「尊大さ」に彩られていたようである。1573年にフィレンツェの「俗称ガアルフォンダ通り」にあった自宅で「出陣」の仕度をしながら遺言状を作成し、その2年後の1575年に死去した<sup>6)</sup>。

1564年9月10日に入団したジュゼッペ・ディ・ポッジョの場合は、これとは事情が異なる。彼の父ベネデットは商売をいとなんでいたが、フランスでの商売に失敗してルッカに帰れなくなった。16世紀半ばのルッカでは、このような事業の失敗は1552年のチェナーミ家、パレンシ家、サンミニアート家の倒産の場合のように決して稀な出来事ではなかったのだ。そして流れてきた先がトスカーナ大公国であった。

ポッジョ家の三人のあとの二人については特筆すべきことはない。史料も多くを語らない。バルトロメオ・ガリカーニは地位の低い「武器の従士」であったし、ジュゼッペ・ベルティは書記であったに過ぎない。

前述のように、6人目のジョ・フラヴィオ・ファヌッチは異例の生涯を送った。ファヌッチ家はルッカの最高官職の「正義の旗手」には手が届かなかったが、公職にはつくことのできた家柄であった。1587年10月4日に18歳で騎士団への入団を許されたが、戦場で活躍したくてウズウズしていた。そこで1596年6月、当時騎士団の看護人であった彼は、「偏見なしに、自分の実力を立証できる戦争に行く」ことができるよう出征の許可を求めた。ちょうどその頃は、1593年から1606年にかけて皇帝ルドルフ2世（位、1576-1612）とオスマン帝国のスルタンとがハンガリー戦争を戦っていた最中であり、1594年の夏以降は、大公フェルディナンド一世も、コ

ジモ一世の庶子ドン・ジョヴァンニ・デ・メデイチ麾下の援軍を皇帝に送っていた時期であった。1595年にはオスマン帝国に対抗するために教皇クレメンス8世（位、1592-1605）の指令で他のイタリア諸国の君主とともに再度皇帝ルドルフ二世を援助するためにトスカーナの軍隊を派兵したところであった<sup>7)</sup>。かくしてファヌッチは晴れてハンガリーの戦役にトスカーナの割り当て人員として参戦することになった。結果はカニーザ（Nagykanizsa）近郊で惨敗し、トスカーナ人を含む多くのイタリア人が戦死した。だがファヌッチは生き延び、無事帰国をはたした。彼が特異なのは、ルッカ人騎士のなかで唯一祖国との結び付きを維持しえた点である。1613年に勃発したエステ家とのガルファニャーナの戦いには祖国防衛のために馳せ参じ、ルッカ軍の「機動部隊」の指揮を託された。晩年はルッカに定住し、1644年3月に死去した。生前の1619年に作成していた遺言状ではサン・タゴスティーノ教会への埋葬を希望していたが、1625年に改めて作成された遺言状では、より由緒ある、より貴族的なサン・フレディアーノ教会への埋葬を希望した。結局、12世紀に建立されたルッカでも一、二を競う美しいロマネスク様式のサン・フレディアーノ教会に埋葬されるという名誉をえることになった。墓に刻まれた銘文は、ジャヴァリーノ（Gyor）奪回戦やカニーザ包囲戦への参加といった彼の青年期の遠征について記録している。ルッカの環境を考えれば、これは異例中の異例のことであったといわざるをえない<sup>8)</sup>。

ファヌッチ以後、ルッカ人の入団は30年以上にわたってない。1620年代になってようやくルッカ人の若者のなかに騎士団の軍服への憧れが芽生え始めたようである。ときはヨーロッパ中が三十年戦争（1618-48）の戦火に巻き込まれていく時期にあたる。トスカーナの安全を守るために最大限の警戒が要求された時期である。1621-24年に四人のルッカ人に騎士団の軍服が授与された。最初の二人フィリッポ・ファティネリとジョヴァンニ・サンティーニは1621年

10月14日に同時にピサの騎士団教会で騎士戦士の軍服を拝受し、その後も二人は行動をともにした。あとの二人グレゴリオ・パニーニとアントニオ・ラッファエリも同様で、1624年7月29日にそろって入団している。パニーニとラッファエリはともに祖国追放の身であるにもかかわらず、1627年2月にそろってルッカに戻るという暴挙に出た。しかしすぐに逮捕され、釈放されるまでの数日間を塔の牢獄の奥で厳しい監視のもとに過ごさねばならなかった<sup>9)</sup>。1624年と1625年には別のルッカ人が入団を志願したが、ルッカ政府から非難されて入団できなかった。これ以後はそのようなことが陸続と起こることになる。

### 入団できなかった志願者たち

17世紀初頭のルッカをめぐる状況はどのようなものだったのであろうか。1620年以来フランス王国とサヴォイア公国はジェノヴァ共和国侵攻計画をねってきたが、1624年にフランスとサヴォイアは共和国領に攻め込むことに最終的に合意し、事実、1625年3月、フランス・サヴォイア（ピエモンテ）両軍の侵攻が始まった。このような危機的な状況がトスカーナの摂政を大いに周章狼狽させた。というもイタリアへの戦争の拡大は大公国をあらゆる危険にさらしたからである。ルッカも同様で、政府が600の歩兵をジェノヴァに派遣する約束をしていた関係上、外港ヴィアレージョにフランス軍かピエモンテ軍が上陸することを極度に恐れていた。

このような時期にルッカの多くの若者がサント・ステファノ騎士団に魅力を感じたとしても不思議ではない。騎士団の軍事訓練がルッカでは味わうことのできない名誉を自分に与えてくれるはずだ、と。しかしルッカ政府の思惑は若者のそれとは違っていた。ルッカ政府は自国の若者がむやみに他国の騎士団に入団することを望まなかった。政府は若者たちの軽薄な願望と行動の責任を最悪の騎士サンティーニのせいにした。彼が1621年10月に騎士団に入団したとき、

すでに37歳、しかも殺人罪を犯していた。ルッカの大使は1621年9月付けの書簡でフィレンツェ政府に、彼は「浮ついた脳味噌」の持ち主で「殺人を犯し」「追放された」犯罪者だ、と書き送っている。実際、このような犯罪は、市民経済の繁栄を支えてきた伝統的な絹織物工業の衰退期には頻発していた。すでにマキアヴェッリは1世紀も前に次のように指摘していた。「この国では毎日のように事件が多発しており、多人数の機関だけでは対処できない。その結果、若者は傍若無人になり、腐敗し、腐敗は野心の引き金となる。ところがルッカには若者を抑制する機関がないために、その無軌道ぶりに輪がかかり、国内に悪い出来事を引き起こしている」<sup>10</sup>。伝統的な工業と商業と金融業に希望を見い出せない若者は、おのずと政治・経済を離れ、軍事を志向する。若者の騎士団への憧れは、閉塞的なルッカ社会のかかえる深刻な不安の徴候だったのである。

1624年以降、ルッカ政府はルッカの軽佻浮薄な若者たちがサント・ステファノ騎士団に入団を希望することに懸念を抱き始めた。「難を逃れるために」ピサに赴いて騎士団に入団したグレゴリオ・パニーニやアントニオ・ラッファエリばかりではなく、他の若者たちも彼らに続こうと望んでいたからである。探りを入れていたルッカの警察担当書記局（Magistrato dei Segretari）には1624年と25年の二年間だけでも数多くの志願者名が届いていた。ポンペオ・ロンモリ、ロドヴィコ・サントウッチ、ロレンツォ・チョメイ、ミケーレ・アルトグラデー（彼もパニーニと同様に追放され、ピサでは「パニーニの仲間」であった）、フィリッポ・ブルマッキ、ジュゼッペ・ヌティーニ、シピオーネ・ランベルティ、ジョ・バッティスタ・ポーニ、ロレンツォ・バンディーニ（彼もまた都市と国家からの追放者）、ロドヴィコ・ボッティーニ、ロレンツォ・カニョーリなどなど。全員血気盛んな若者で、何人かはすでに牢獄で過ごした経験のある前科者であった。なかにはフィリッポ・ブルマッキのように1625年に殺人を犯し

て死刑になりかかった男もいた<sup>11</sup>。彼らの家柄は由緒はあったが、当時は事業の失敗などで二流に零落した没落貴族が多かった。

ロドヴィコ・ボッティーニの場合には、父親のピエトロ・ディ・ジョヴァンニ・ボッティーニがモーリシャスの騎士になるほどの名門の出であったが、その父はかなり以前に死去していた。寡婦となった母マリア・ディ・ロドヴィコ・ペニテジは、死んだ夫の家と折り合いが悪く、ルッカから飛び出した。そしてペシアに赴き、さらにピサにたどり着いて、借金を背負う困窮の生活を送った。父方のボッティーニ家が高貴な家柄であったように、母方のペニテジ家もまた高貴な家柄で、母の祖父ゲラルド・ペニテジは公爵アレックスandroのもとに派遣されたルッカ共和国の大使をつとめたこともある人物であった。その息子ステファノはフェルディナンドがまだ枢機卿だったころに酌人をつとめ、その後も大公となったフェルディナンドに仕え続けた。そのような縁で母方のペニテジ家はメディチ宮廷と関係があったのだ。ピサに暮らす貧しい母のためにも、息子のロドヴィコが騎士団の栄光の旗印のもとに一旗揚げようとしたとしても不思議ではなからう。しかしルッカ政府は、ルッカ人の魂を売った売国奴を激しく非難し、サント・ステファノ騎士団への入団を不成功に終わらせた。

ルッカ政府は、「由緒あるわが市民にしてサント・ステファノの軍服をまとおうとたくらんでいる者がいるが、それはフィレンツェ人がかなりの報酬を期待させてできるだけ便宜を彼らに与えているからである」と考えた。そのような特別待遇があったとは考えにくいだが、ともあれルッカ政府は騎士団に入ろうとする者に法律で死刑と財産没収を定めた。ピーク時の1624年には、ルッカ政府はほとんど毎日のように騎士志願者問題に直面せざるをえなかった。そんなおりの6月25日、トスカーナ大公母（クリスティーナ・ディ・ローレナ）が当時ルッカ在住のあるフィレンツェ人を通じて、ピエトラサンタの牢獄から逃亡したある女性を逮捕するよう

に要求してきた。これに対して、ルッカ政府はフィレンツェ側こそ犯罪者の志願者を拒否するように、と要求をつっぱねた。

ルッカ政府のいちばんの懸念は、共和国の周辺に軍隊が配備されて共和国に対する亡命者の反乱が起こることであった。1625年の夏には根も葉もない奇妙な噂が流れた。「大公はルッカ攻撃を希望し、何人かの貴族が城門の塔を明け渡そうとしている」というのである。そしてステファノ騎士のサンティーニとパニーニの名があがった。また噂のなかには、アレッシンドロ・アンテルミネッリの名もあってルッカ政府を震え上がらせた。彼は1596年の親メディチ家陰謀事件に関わった唯一の生き残りで、ロンドンに逃亡してアッリーゴ・サルヴェッティの偽名で潜伏し、常にメディチ宮廷と親密な関係を維持していた。その男がトスカーナに戻ろうとしているというのである<sup>12)</sup>。

フィレンツェ在住のルッカ大使は、入団を志願する疑いのある者や噂のある者の氏名を母国に書き送り、本人が断念するまで家族全員に執拗な圧力をかけ続けた。そのようなことが1631年のアレッシンドロ・ブルマッキの場合や、1635-36年のフェッランテ・ルッケジーニ（騎士ファティネッリの息子）、ニコラオ・ディ・ジョヴァンニ・セルジュスティ、セッティモ・ディ・ニコラオ・オルスッチ、ベルナルディーノ・オルスッチなどの若者たちの場合に起こった。

ルッカ人大使が監視を続けただけでなく、数年来リヴォルノに店を構えていたルッカ人ボニファツィオ・メノッキのような一般市民までもが、ピサやリヴォルノで騎士団に入団しそうな者に目を光らせていた。また家族とともにルッカで暮らしていたメディチ家の代理人オラツィオ・トゥッチェレリがルッカ政府から疑いの目で睨まれた。結局、ルッカ政府の執拗な監視と抗議は、フェルディナンド二世の治世初期以降、他のルッカ人が騎士団に入団することを思いとどまらせることに成功したのだった。

## ルッカとフィレンツェ

騎士団の会則によれば、十分な資格のない者や貴族の証明ができない者には、「コンメンダ・ディ・パドロナート（所有権の騎士禄）」を創出することによって騎士にしてもらえる可能性があった。すなわち騎士になるために限定相続人に指定されて主に不動産や時には動産といった財産を遺贈する方法である。騎士の名誉も金しだいなのである。このような方法によってサント・ステファノ騎士団は他の騎士団と異なり、団員のなかに社会的上昇者を受け入れることができ、約2世紀にわたってトスカーナにおける社会的流動性をつくりだす要因ともなった。だがこの方法はルッカ政府によってルッカ人には適用できないものとされ、「コンメンダ」を創設しようとする、それはすぐに「祖国への悪意の表れ」と烙印をおされた。1624年にラッファエリとパニーニがかるうじて入団しえたのは、少なくとも二人が「コンメンダ」を創出するために多大な犠牲を払ったからである。前者はルッカの持ち家を、後者はコンタードで相続することになっていた家を、それぞれあるルッカ市民に売却しなければならなかったのだ。

要するにルッカでは、サント・ステファノ騎士団は何よりもまず軍事訓練をほどこされた軍事集団に他ならなかった。だからこそ、1608年頃のことであったが、小商人の家柄のルッカ人青年ジョヴァンニ・ディ・サルヴェストロ・ブリアーミがサント・ステファノ騎士団のにせの十字章をひけらかしながらモデナ方面を脅かしてまわる事件も起こりえたのだ。ちなみにその青年にはメディチ家のガレー船で長年漕刑をつとめるという悲惨な運命がまっていた<sup>13)</sup>。メディチ家の大公に仕えるという選択は、ルッカでは悪意をもって見られるか厳しく批判されるものでしかなかった。だがそればかりではなく、ルッカ社会は古い商人精神を完全には捨て切れない社会でもあった。ルッカの商人は息子たちが遠隔の地クラクフ（Cracovia）の商館かもつ

と近いリヴォルノで商売をしてくれることを願っていた。寡頭体制の団結は国家の安全が脅かされる重大な危機に対しては、よりいっそう強まるものである。特に政府を構成するほどの家系は、子弟を騎士団から遠ざけるためには一致団結した。

トスカーナ大公国の外では概してステファノ騎士は高い名誉を享受したが、ルッカでは事情は違った。ペシア人のサント・ステファノ騎士アドリアーノ・バルバが、ルッカの市門で警備兵と口論になったのは1660年代半ばのことであったが、それはちょうど共和国と大公国の関係がふたたび緊張していたときであった。ペシア人騎士はすぐに起訴され、150スクードを支払って釈放されたが、このときにルッカ政府と大公フェルディナンド2世のあいだに起こった係争は二冬続き、ステファノ騎士はルッカではさらに悪く見られるようになった。これとは対照的にルッカ市民が自分たちの高貴さを立証するために尊重したのは、1571年にサヴォイア公が創設したサンティ・マウリツィオ・エ・ラザロ騎士団、そして特にマルタ騎士団であった。マルタ騎士団は「16世紀後半から17世紀初頭にかけて、貴族的・軍事的・カトリック的な共通の特徴をもつ集団のなかでも、さまざまな起源の貴族の結束と正統性をもつ最も重要な機関となった」<sup>14)</sup>。そして、その団員のなかにはルッカの最上層市民に属する多くの若者が含まれていた。1565-1700年の期間に、ブオンヴィーゼ家、チェナーミ家、アルノルフィーニ家など、50弱の家名が見える<sup>15)</sup>。ルッカ市民はライヴァル国のサント・ステファノ騎士団ではなく、超国家的なマルタ騎士団を選んだのである。

## 注

- 1) マキアヴェッリ、武田好訳「ルッカ事情概要」『マキアヴェッリ全集6』筑摩書房、2000年、126ページ。
- 2) 特に16世紀における両国の関係については、Marino Berengo, *Nobili e mercanti nella Lucca del Cinquecento*, Torino, 1974, pp. 147-234.
- 3) 騎士団員のリストは、G. Guarnieri, *L Ordine di S. Stefano nei suoi aspetti organizzativi interni sotto il gran magistero mediceo*, voll. 4, Pisa, Giardini, 1966. 以下も参照。F. Angiolini, *I cavalieri e il principe. L Ordine di Santo Stefano e la società toscana in età moderna*, Firenze, Edizioni EDIFIR, 1996, p. 100.
- 4) Rita Mazzei, “Lucca e Firenze. I lucchesi cavalieri di Santo Stefano in età medicea”, in *Archivio storico italiano*, II, 1999, Firenze, p. 270.
- 5) マキアヴェッリ、前掲書、131ページ。この事件についてはマリーノ・ベレンゴも一節をさいている。Berengo, *op. cit.*, pp. 83-99.
- 6) Rita Mazzei, *op. cit.*, pp. 271-272.
- 7) Giorgio Spini, “Il principato dei Medici e il sistema degli Stati europei del Cinquecento”, in *Firenze e la Toscana dei Medici nell'Europa dell'500*, I, Firenze, Olschki, 1983, pp. 211-213.
- 8) Rita Mazzei, *op. cit.*, pp. 273-274.
- 9) *Ibid.*, p. 275.
- 10) マキアヴェッリ、前掲書、130ページ。
- 11) Rita Mazzei, *op. cit.*, p. 276.
- 12) *Ibid.*, p. 279.
- 13) *Ibid.*, p. 282.
- 14) Claudio Donati, *L idea di nobiltà in Italia. Secoli XIV-XVIII*, Bari, 1988, p. 233.
- 15) マルタ騎士団へのルッカ人の入団については、*ibid.*, pp. 249, 251.

(2000年12月6日受理)